

# 天界寺跡ほか出土の土器

Pottery Excavated from the Tenkaiji Temple Site and Other Sites.

西銘 章

NISHIME, Akira

---

ABSTRACT : This paper is an additional report on pottery excavated from the Tenkaiji temple site, the Shuri-jo castle site, and the Wakuta kiln site. It also includes amendment and additional information on pottery from the Yacchinogama cave site, the Shinzatomotojima-johodaichi site, and the Shinzato Higashimotojima Site. In addition, a report on pottery from the Arahigashi site is also included as a supplement.

---

## 1. はじめに

ここでは既報の天界寺跡ほか出土の土器の追加・訂正、新たに阿良東遺跡の土器を報告する。

まず、天界寺跡、首里城跡、湧田古窯跡から出土した土器<sup>1)</sup>のうち、宮古式土器、中森式土器、その他の土器を追加報告する。これらの遺跡は複数回にわたって調査が行われているため、地区ごとに報告する。また、ヤッチのガマ、新里元島上方台地遺跡、新里東元島遺跡の報告の訂正等も行う。

阿良東遺跡において行った試掘調査で出土した土器と、報告を訂正する天界寺跡の土器は内容が異なるため付編とした。

## 2. 天界寺跡ほか出土の土器

### ① 天界寺跡

天界寺跡は沖縄県教育委員会、那覇市教育委員会の調査がある。ここでは沖縄県教育委員会による西地区（埋文センター 2002b）、東地区（埋文センター 2001a）の土器をあげる。第1図1～15は西地区、第1図16～19は東地区出土の土器である。遺物の詳細は観察表にまとめた（以下同じ）。土器の再集計は行っていないが、西地区からの出土が多いと感じた。なお、西地区の土器の報告において、Ⅰ類は宮古式、Ⅱ類は中森式ないしパナリ焼に相当する。

第1図1～10は宮古式で、おおむね宮古第一型式（以下、第一型式）で、1点のみ同第二型式（以下、第二型式）と思われる資料がある。器種は壺形と鉢形<sup>2)</sup>があり、今回とりあげた資料で特徴的なものは口唇部を平坦に成形するものである。

1～9は第一型式である。壺形は1・2で外反の弱いものである。4・5も壺形と思われ、これらは外反が強いもので、特に5は強く折り返す。5は破片が小さいため傾きの設定に難があり、平坦に形成した口唇面は側面ではなく上にむく器形の可能性もある。2は舌状に形成した部分を口唇部として図化した。下側として図化した部分は平滑になっており図示で上側とした部分は断面が摩滅したもので、下側が口唇部の可能性もある。あるいは壺形ではなく、上側、下側とも残存しており、それならば側面に窓状の切れ込みをもつ器種（七輪?）も考えられる。とりあえず壺形とする。鉢形は口縁がやや弱く内傾、外反するものがあり、9は口縁がハの字状に開く器形である。1は器面が黒色を呈し、ミガキにより光沢がある。似た土器として9・20などがある。

10は内面に回転台<sup>3)</sup>によると思われる調整をナデ消ししているようであり、断面は弱く波状に見える。第二型式の可能性もあるが保留する。口縁部が強く内傾するため、器種は炉であろうか。

11～13は中森式である。器種は壺ないし鉢形である。

14・15は宮古式、中森式とも異なる土器である。14は混和材に貝殻片を多量に含み、器種はハート形の窓をもつ炉（または風炉？）であろうか。15は全形をうかがうことはできないが、楕円形に近いような浅鉢ないしは皿形であろう。大きさ（深さ）のわりに器厚が約2cmと厚ぼったい。貝殻と思われる細片を多く含むが胎土は宮古式や中森式と異なる。

第2図16・17は中森式で16は壺形、17は壺ないし鉢形であろう。18はパナリ焼の壺形。19は宮古式、中森式とも異なる土器で、混和材は中森式に近い。一部に漆喰？が付着する。

## ② 首里城跡

書院・鎖間地区（埋文センター2005）、下之御庭・ほか地区（埋文センター2001b）の土器をあげる。第3図20・21が書院・鎖間地区、同図22～24が下之御庭・ほか地区出土の土器である。首里城跡各地区の土器をすべて確認できなかったが、土器（宮古式など）の集中する地区は特になさそうである。

20が宮古式、21がパナリ焼である。20は第一型式の壺形で、なで肩の器形をなす。口縁部資料と胴部資料の接合に難はあるが、おおよそ同一個体とみてよいだろう。その他にも同一個体と思われる資料が出土している。21はパナリ焼で口縁が強く外反する器形をなす。

下之御庭・ほか地区の資料は22が中森式、23がパナリ焼、24は不明の土器である。22は中森式の壺形であろう。23はパナリ焼で底部から直に立ち上がる鍋形である。24は第一型式に類似するが、きわめて硬質である。底面には白色細粒がかなり多く付着する。

## ③ 湧田古窯跡

湧田古窯跡の調査のうち、警察棟地区（沖縄県教委1997）、行政棟地区（沖縄県教委1993）の土器をとりあげる。土器は警察棟地区からの出土がもっとも多いようで、土器の集中するグリッドもあった。第4図25～37が警察棟地区、第4図38が行政棟地区出土の土器である。

25～31は第一型式で、25～27、30・31が壺形、28・29が鉢形である。壺形の口縁形態は、25は頸部の形成が弱くてゆるく外反、26は頸部が直に伸びて口縁がゆるく外反する。30・31は壺の底部で、いずれもゆるく立ち上がる。28は資料が小さいため壺形の可能性もあるが、住屋遺跡（平良市教委1983）などで出土する浅鉢形のような器高の低い器形と考えておく。把手をもつものは25と29である。25は宮国元島遺跡（上野村教委1980）出土の壺形に似る。29は横耳状に成形する。

32・33はパナリ焼、34～37は中森式である。パナリ焼はいずれもゆるく外反する器形の壺形で断面がサンドウィッチ状。35～37は胎土や混和材、器面調整が類似する資料で、器面調整（ナデカケズリ）を行ったため混和材の粗粒が動いた痕がある。36・37は同一個体の可能性もある。37は接合がわずかなため下半部を推定線で示した。

38は第一型式で、小破片のため判然としないが28と似た器形だろう。

## ④ 小結

宮古式土器について少しまとめる。沖縄諸島から宮古式の出土する遺跡は管見のおよぶ分では20遺跡ほど<sup>4)</sup>で、これらもほぼ第一型式が占めるように、ここで報告した宮古式で型式の判明するものは第一型式である。沖縄諸島の墓からは主に壺形、グスクや集落跡などは壺形に鉢形が伴う。報告したものも主に壺形で鉢形など他の器種が伴う点が共通する。宮古式の胎土はいくつかに分類されているが、沖縄諸島で出土する宮古式はざらざらした感じの砂泥質の胎土が多い。今回もこれに準ずる。時期の検討については省略する。

確実に第二型式といえるものはない。第1図10は混和材に白色粒（貝殻含む）や赤色粒を用いる点は他の第一型式に似ており、宮古式に含めてよい。尻並遺跡（埋文センター2003）のB類の土器と比較しても混和材などに類似が認められる。

表1 土器観察一覧

※「+」は接合を示す

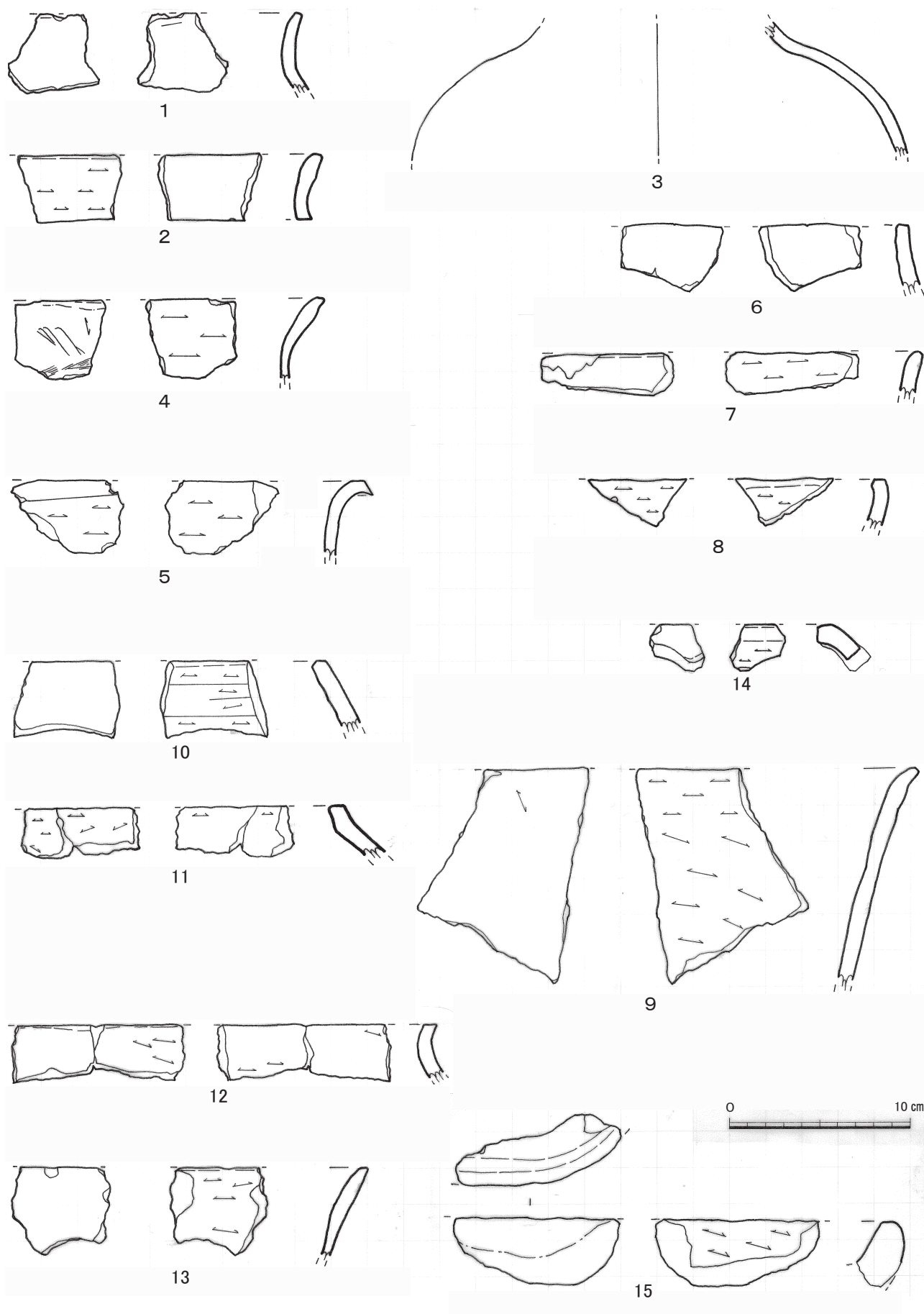
図番号	区・層位	型式	器種／部位	大きさ(cm)	器面調整	胎土／混和材	色調	焼成	備考
第1図 図版1 1	J-26黒褐色土	宮古	壺／口縁	—	外面はミガキ、内面はナデ(口縁は横位のナデ)	砂泥質／白色細粒(多)、赤色粒	外:黒7.5YR2/1 内:橙5YR6/8	堅緻	
第1図 図版1 2	H-22・23方形状遺構 礫溜暗褐色	宮古	壺?／口縁	—	外面は横位のナデ、内面は方向不明のナデ	砂泥質／白色細粒、赤色粒	外・内:橙2.5YR6/8	良好	下側にした部分は平滑でこちらが口唇部の可能性もあり。
第1図 図版1 3	H-25暗褐色土層	宮古	壺／肩部	—	外面は全体的にミガキ、内面はナデ	砂泥質／白色細粒(多)、赤色粒	外:肩部は黒7.5YR2/1、胴部は明黄褐10YR7/6 内:橙5YR6/8	良好	
第1図 図版1 4	M-23黒褐色土下部	宮古	壺?／口縁	—	外面はヘラミガキ、一部にケズリ?、内面はナデ	砂泥質／白色細粒(かなり多、貝殻含む)、赤色粒	外:黒10YR1.7/1 内:橙2.5YR6/8	良好	
第1図 図版1 5	J-28暗褐色土	宮古	壺?／口縁	—	内外ともナデで平滑	砂泥質／白色細粒(かなり多、貝殻含む)、赤色粒	外:明赤褐2.5YR5/8 内:橙7.5YR7/6	堅緻	傾き難あり。
第1図 図版1 6	K-28暗褐色砂利混下部	宮古	鉢／頸部	—	内外とも方向不明のナデ	砂泥質／白色細粒(かなり多)、赤色粒(多)	外:橙5YR6/6 内:橙5YR7/8	堅緻	
第1図 図版1 7	I-28礫混黒褐色土層 10-20	宮古	鉢／口縁	口径:14.4	内面は横位のナデ、外面は摩滅	泥質／白色細粒(多)、赤色粒	外:橙5YR7/4 内:にぶい橙7.5YR7/4(一部は明赤褐2.5YR5/8)	堅緻	
第1図 図版1 8	I・H石列・下部南側溝	宮古	浅鉢／頸部	—	内外ともナデで平滑、外面はミガキ?	砂泥質／貝殻(多)、赤色粒、鈎物細粒	外:褐灰7.5YR4/1(一部は橙7.5YR6/8) 内:灰黄褐10YR6/2	堅緻	
第1図 図版2 9	H-28暗褐色混礫土層上部	宮古	甕／口縁	—	外面はミガキ、内面はナデで平滑	砂泥質／白色細粒(かなり多、貝殻含む)	外:黒5YR2/1 内:橙7.5YR6/6	堅緻	
第1図 図版2 10	J-24暗褐色土層	宮古	炉?／口縁	—	外:外面は方向不明のナデ、内面は回転ナデ?をナデ消し	砂泥質／白色粒(貝殻含む)、赤色粒	外・内:橙5YR6/8	堅緻	第二型式か?
第1図 図版2 11	J-27溝状遺構60	中森	壺?／口縁	—	内外ともナデ	砂泥質／白色粒(貝殻など:かなり多)	外:橙5YR6/8 内:暗灰黄2.5Y5/2	良好	
第1図 図版2 12	J-27礫溜下暗褐色土+J-26ピット14	中森	鉢／口縁	—	内外とも横位のナデ	砂泥質／白色細粒、石灰粒	外:橙5YR6/8 内:明黄褐10YR7/6	堅緻	
第1図 図版2 13	西地区(出土地不明)	中森	鉢／口縁	—	外面は方向不明のナデ、内面は横位のナデ	砂泥質／貝殻片(多)、白色粒(多)、灰色粒	外・内:明赤褐2.5YR5/8	堅緻	
第1図 図版2 14	西地区(出土地不明)	不明	火炉?／口縁	—	内外ともナデ	砂泥質／貝殻片、白色細粒、赤色粒(少)	外:橙7.5YR6/6 内:オリーブ褐2.5Y4/4	堅緻	
第1図 図版2 15	J-27西側畦暗褐色土	不明	鉢?／口縁	—	内外ともナデ	砂質／貝殻片(多)、赤色粒、白色細粒	外:にぶい黄2.5Y6/3 内:明黄橙10YR6/6	堅緻	
第2図 図版3 16	せ-17黒褐色混礫土層(100~130レベル)	中森	壺?／口縁	—	内外ともナデ	砂泥質／白色粒(多)、白色細粒(多)、灰色粒(少)	内外:橙5YR6/8	堅緻	
第2図 図版3 17	せ-17茶褐色混礫土層(3層)	中森	不明／口縁	—	内外とも方向不明のナデ、口唇は平坦に成形	砂泥質／白色粒、白色細粒	外:明黄橙10YR7/6 内:黄橙7.5YR7/8	堅緻	
第2図 図版3 18	ち-13地山直上	パナリ	壺?／口縁	—	外面はナデ、内面は条痕残る	泥質／白色粒(少)、白色細粒(少)	外:橙5YR6/6 内:明赤褐5YR5/6	堅緻	断面がサンドウィッチ状。
第2図 図版3 19	せ-17旧階段横2列右列下黒色混礫土層+せ-17黒褐色混礫土層	不明	壺／肩部	—	内外とも横位のナデ	砂泥質／白色粒、白色細粒	外:にぶい黄橙10YR7/4 内:橙7.5YR7/6	堅緻	漆喰?が付着する。

表2 土器観察一覧

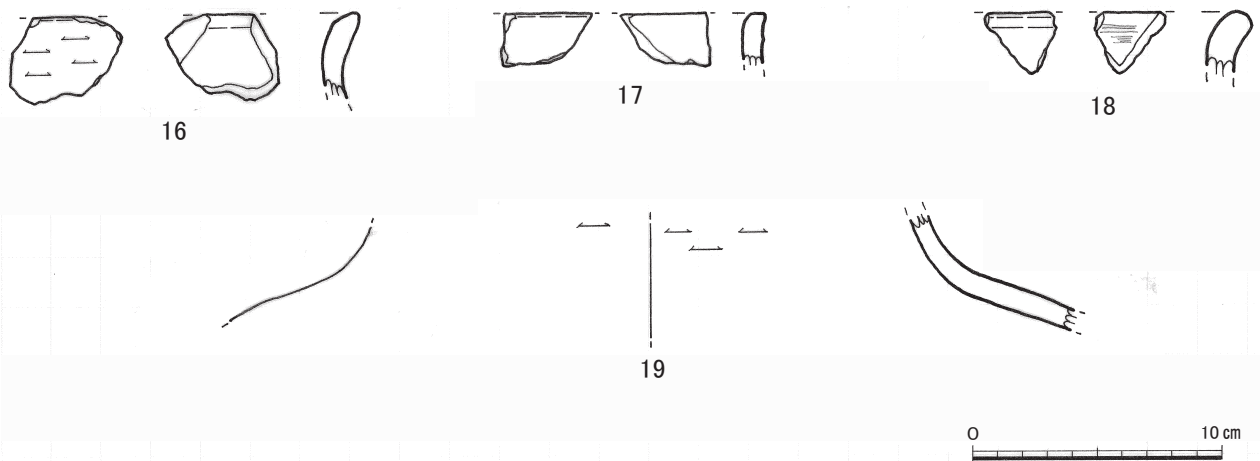
※「+」は接合を示す

図番号	区・層位	型式	器種／部位	大きさ(cm)	器面調整	胎土／混和材	色調	焼成	備考
第3図 図版4 20	E1 岩山埋土	宮古	壺／口縁～ 胴部	口径:19.0	外面は工具によるミガキ、内面は一部に工具によるナデ?	砂泥質／白色細粒(かなり多)、赤色粒	外:橙5YR6/6(一部は黒2.5YR2/1) 内:明赤褐5YR5/8	良好	
第3図 図版4 21	E1 岩山客土	中森or パナリ	壺?／口縁	—	内外とも横位のナデ	砂泥質／石灰粒(多)、白色細粒(多)	外:橙7.5YR6/8 内:明褐7.5YR5/8	堅緻	
第3図 図版4 22	木曳門不明	中森	壺／口縁	—	外面はナデ、内面は横位のナデ	砂泥質／貝殻片(石灰粒含む)、赤色粒(極少)	外:にぶい黄橙10YR6/3 内:にぶい黄橙10YR7/4	良好	
第3図 図版4 23	木曳門MO-142	パナリ	鍋／底部	—	胴下半に工具によるナデ、底面にナデ	泥質／貝殻片(かなり多)	外:明赤褐5YR5/8 内:赤褐5YR4/8	良好	断面がサンドウィッチ状。
第3図 図版4 24	廣福門北西	不明	壺／底部	底径:13.8	内外ともナデ	砂泥質／白色細粒(かなり多)、赤色粒(少)	外:橙5YR7/6 内:橙5YR7/8	堅緻	
第4図 図版5 25	警察棟 ウ-16黒褐色土層+イ-18黒褐色土層	宮古	壺／口縁～ 肩部	口径:13.6	全体的に荒れている、頸部に工具によるナデ	砂泥質／白色細粒(かなり多)、赤色粒(多)	外:黒2.5YR2/1 内:橙5YR6/8	良好	
第4図 図版5 26	警察棟 ウ-18屋敷跡黒褐色土層	宮古	壺／口縁	—	内外とも方向不明のナデ	砂泥質／白色細粒(かなり多)、赤色粒	内外:橙5YR6/8	堅緻	
第4図 図版5 27	警察棟 タ-5黒褐色土層 最下部石敷遺構	宮古	壺／肩部	—	頸部に工具によるケズリ、下半にナデ、胴部はミガキ	砂泥質／白色細粒(かなり多)、赤色粒	外:灰5Y5/1(一部は橙5YR6/8) 内:橙5YR6/8	堅緻	
第4図 図版5 28	警察棟 ウ-18黒褐色土層	宮古	鉢／口縁	—	口縁内外にナデ、頸部にミガキ	砂泥質／白色細粒(かなり多)、赤色粒(少)	外:橙5YR7/6(一部は黒7.5Y2/1) 内:橙5YR6/6	堅緻	
第4図 図版5 29	警察棟 ウ-18屋敷跡黒褐色土層	宮古	鉢／胴部	—	内外とも方向不明のナデ、把手部は粗いナデ	砂泥質／白色細粒(多)、赤色粒	外:黒褐10YR3/1 内:橙7.5YR7/6	堅緻	
第4図 図版5 30	警察棟 ウ-18黒褐色土層	宮古	壺／底部	底径:11.2	内外とも方向不明のナデ	砂泥質／白色細粒(多)、赤色粒	外:灰黄褐10YR5/2(一部は黒10YR2/1) 内:にぶい橙7.5YR7/3	堅緻	
第4図 図版5 31	警察棟 セ-8淡褐色土層	宮古	壺／底部	底径:14.0	外面はナデかミガキ、内面は立ち上がり部に指オサエ、上位はナデ	砂泥質／白色細粒(かなり多)	外:黒5Y2/1 内:明黄褐10YR6/6	堅緻	
第4図 図版6 32	警察棟 セ-8淡褐色土層	パナリ	壺／口縁	口径:10.0	内外ともナデ、内面の一部に指オサエ	泥質／白色粒(かなり多)	外:明赤褐2.5YR5/8(一部は黒褐5YR2/1) 内:明赤褐2.5YR5/8	堅緻	断面がサンドウィッチ状。
第4図 図版6 33	警察棟 ウ-15最下部遺物溜まり黒褐色土層	パナリ	壺／口縁	—	内外とも横位のナデ	泥質／白色粒(多)	内外:明赤褐5YR5/8	良好	断面がサンドウィッチ状。
第4図 図版6 34	警察棟 ツ・テ-3・4黒褐色土層	中森	不明／口縁	—	内外ともナデ	砂泥質／白色細粒、褐色粒	内外:明褐7.5YR5/6	良好	
第4図 図版6 35	警察棟 セ-8淡褐色土層	中森	鉢／口縁	—	内面はナデ、外面は強いナデで混和材が引きずられる、口唇部に工具によるケズリ	砂泥質／貝殻片(多)、白色粒(多)	外:褐7.5YR4/4 内:明赤褐2.5YR5/8	堅緻	外面にスス付着。35～37まで胎土などの質感が類似する。
第4図 図版6 36	警察棟 セ-7淡褐色土層	中森	鉢／口縁	—	内外とも工具によるケズリ	砂泥質／白色粒(多)、貝殻片	外:黒褐10YR3/1(一部は暗褐10YR3/4) 内:赤褐5YR4/8(一部は黒褐10YR3/1)	堅緻	36・37は同一個体の可能性もあり。
第4図 図版6 37	警察棟 セ-7淡褐色土層	中森	鉢／口縁～ 胴部?	—	内外とも工具によるケズリ?、内面胴下半は強いナデ	砂泥質／白色粒(多)	外:黒褐10YR3/1 内:赤褐5YR4/8	良好	胴部の接合はやや難ありのため波線で記した。
第4図 図版6 38	行政棟 セ-44 第1瓦層	宮古	鉢／口縁	—	外面はミガキ、内面はナデ	砂泥質／白色細粒(多)	外:黒7.5YR2/1 内:橙7.5YR6/8	堅緻	

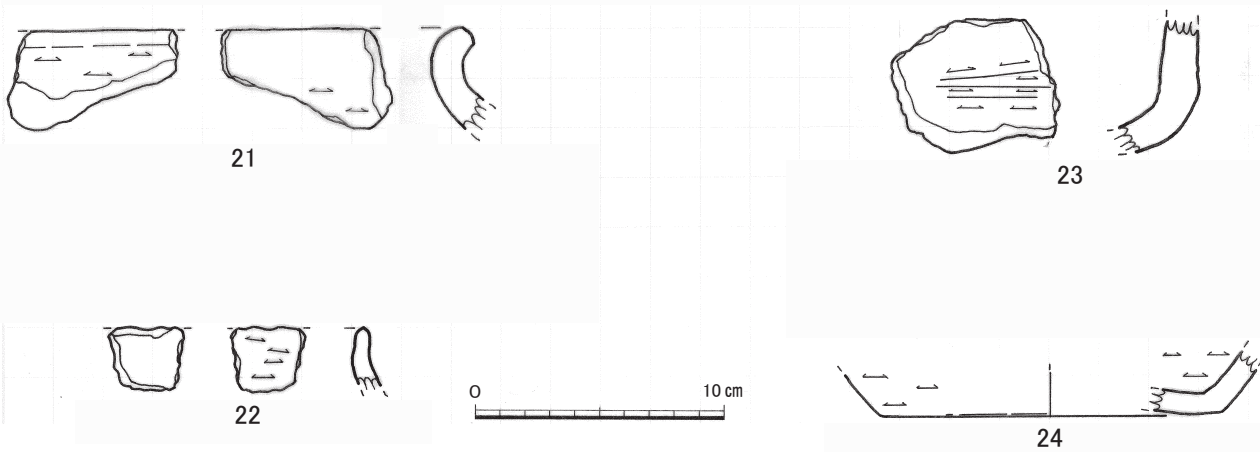
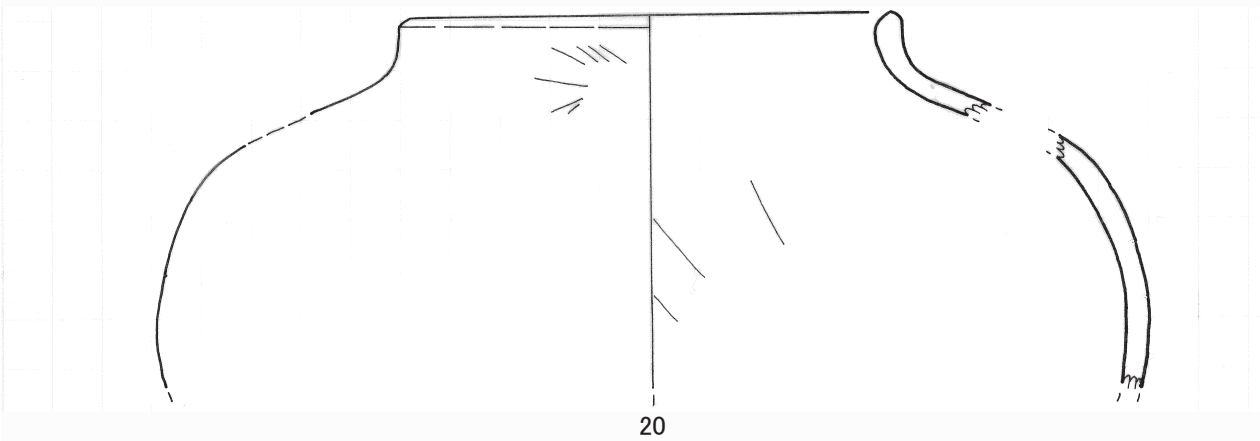




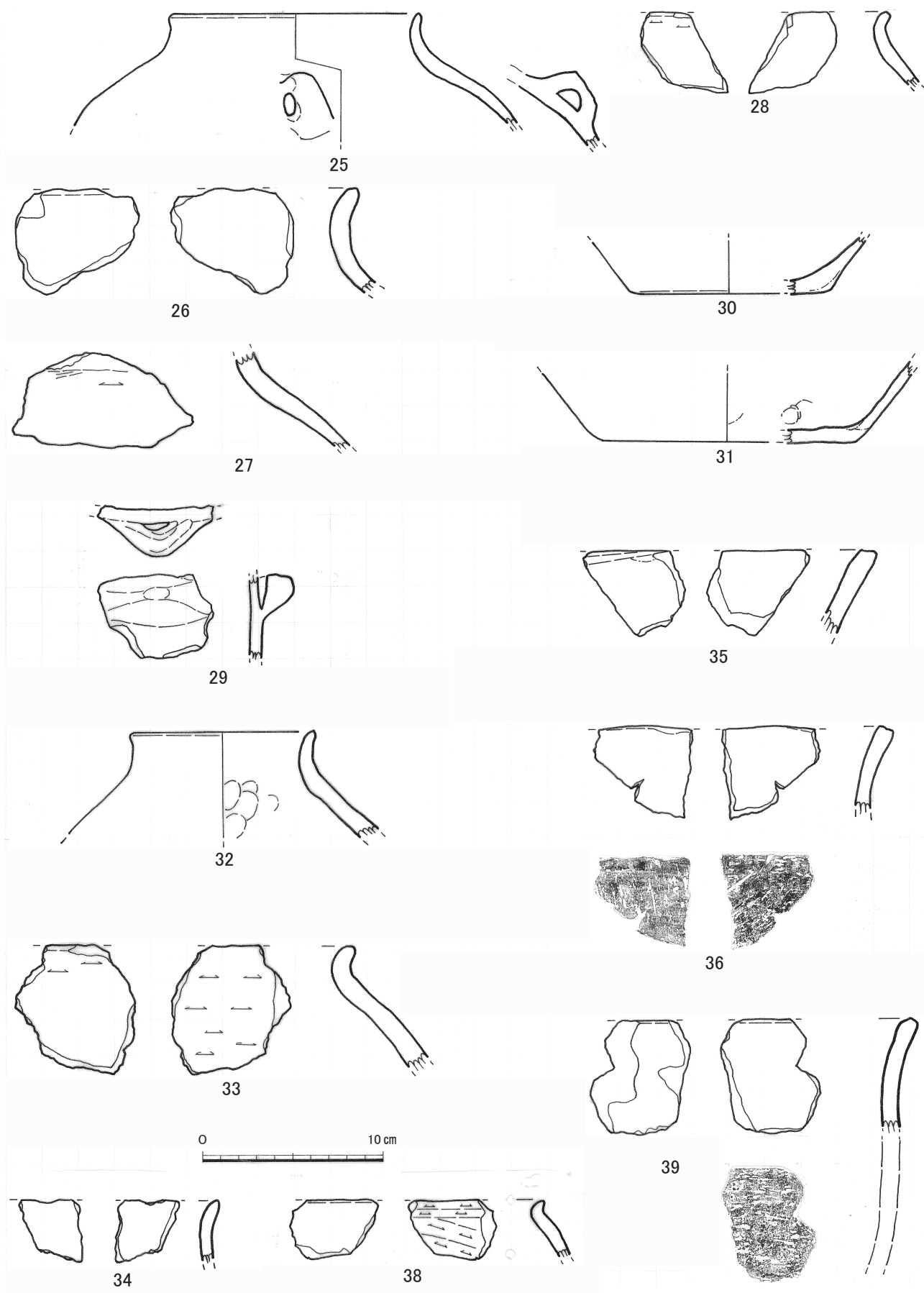
第1図 天界寺跡（西区）出土の土器



第2図 天界寺跡（東区）出土の土器



第3図 首里城跡出土の土器



第4図 湧田古窯跡出土の土器



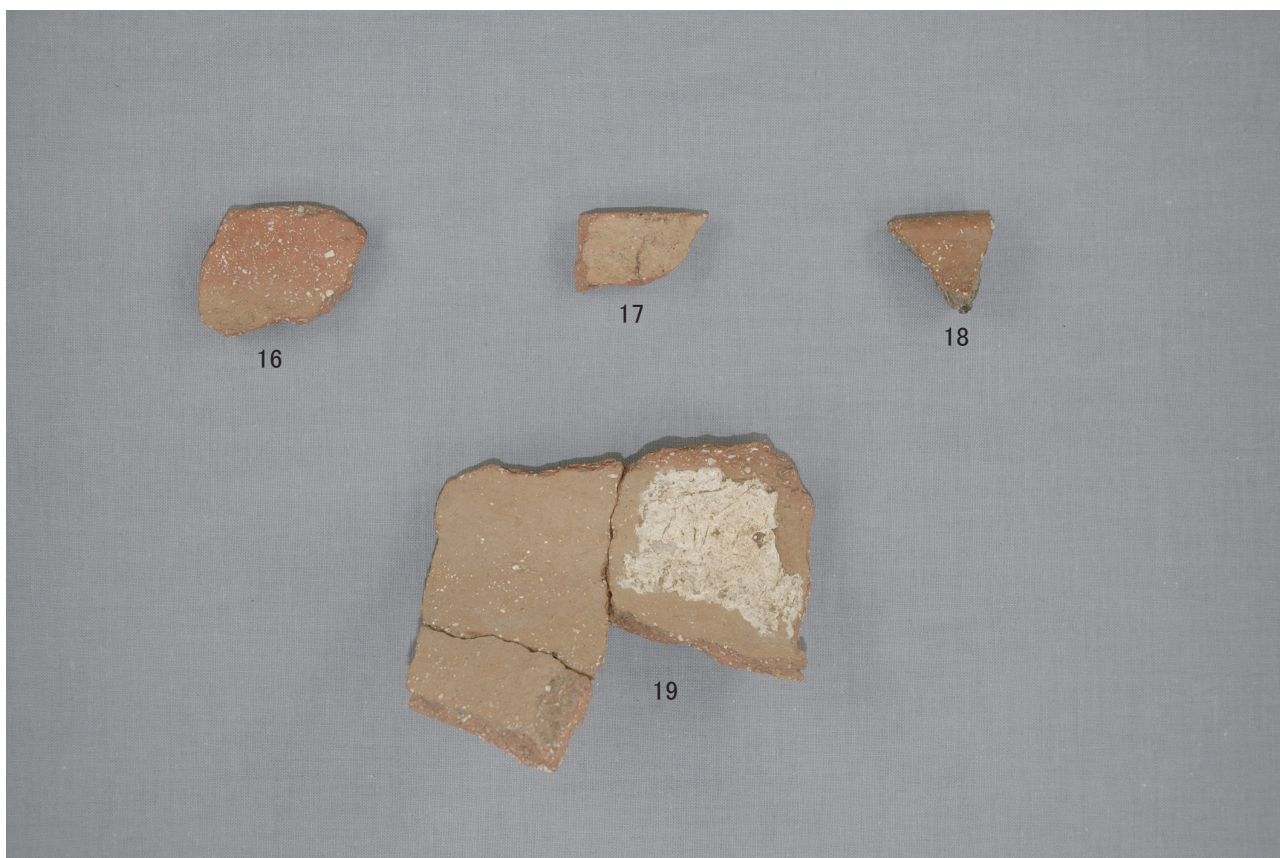


図版1 天界寺跡西区出土の土器 (1)



図版2 天界寺跡西区出土の土器 (2)





図版3 天界寺跡東区出土の土器



図版4 首里城跡出土の土器





図版5 湧田古窯跡出土の土器（1）



図版6 湧田古窯跡出土の土器（2）



### 3. 報告資料の追加・訂正

筆者が報告書で関わったもののうち、次の2点について資料の追加・訂正を行う。

#### ① ヤッチのガマ

報告書（埋文センター 2001c）の厨子の項目で土器をあげたが、分類基準の記載を漏らしていた。土器の分類は、まず器形で次のとおり2つに大別した。

A：器高が胴の最大径より低いもの、

B：器高が胴の最大径よりも高いもの

そして、口縁部の形態で次のとおり3つに細分した。

a：頸部が直に立ち上がり口縁がゆるく外反するもの

b：頸部が短く口縁がゆるく外反するもの

c：頸部を形成しないもの

報告書では器形と口縁部の形態を組み合わせた分類で示した。

報告書第58図8の鉢形（報告書では鍋形）を厨子の項目で掲載した。この土器は土中（崩落した石灰岩が堆積した部分）からの出土で、骨が入っていたわけではない。口径は23.4 cmで、厨子としてあつかった壺形とかわらないが、器高は20 cm前後と推算でき、納骨のための容器としては大きくない。そのため、厨子ではないと考えられる。同図5も骨を納めていたわけではないが、区画内出土であることやある程度の大きさがあるため厨子と考えてよいだろう。

同図10で不明とした土器はパナリ焼とする。カンジン原古墓群でパナリ焼を1点（4号墓）と報告したが、宮古式として集計した中に1・6号墓に中森式が各1点ある。また、4号墓に宮古式の底部を1点追加（4号墓の宮古式は計2個体）する。さらに追加。ヤッチのガマ奥側洞穴部分からグスク土器（後期土器を含むか）と思われる土器胴部片が数点あった。

#### ② 新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡

報告書（埋文センター 2002a）で土器は、胎土でⅠ類：砂泥質のもの、Ⅱ類：泥質のもの、Ⅲ類：その他とした。Ⅰ～Ⅲ類とも多くが第一型式に含まれ、Ⅰ・Ⅱ類の中に第二型式、Ⅲ類の中に野城式土器<sup>5)</sup>を確認した。

新里元島上方台地遺跡で第二型式は明確な資料を確認できなかったが、新里東元島では報告書中第58図6・8が第二型式である。図・写真では明瞭でないが、内面に回転台による調整の痕がのこる。

Ⅲ類のうち外耳を貼付した資料とセンター収蔵の資料と比較したところ、報告書第39図4～6・8は野城式に比定してよい土器である。こちらは上方台地遺跡からの再確認である。

#### 注事項

- 1) 宮古式土器は安里による設定（安里 1975）、中森式土器は高宮による設定（高宮 1981）の土器型式とした。パナリ焼は島袋（2005）などを参考にした。その他の土器は宮古式や中森式に胎土などが似るもののそれらとは異なる土器とした。型式判定にあたっては金城亀信氏、新垣力氏からご教示いただいた。
- 2) 器種の推定ができる資料が少ないため、壺形以外と思われる広口の器種の一部は仮に鉢形とした。また、ここでいう鉢形は住屋遺跡（平良市教委 1983）で報告する浅鉢形も含む。埋文センター（2002a）で報告した鉢・鍋形も鉢形とまとめておく。埋文センター（2002b）で甕ないし壺形と報告した資料（第54図5）は第1図10に器形が似るため炉形とする。
- 3) 回転台・ろくろの定義は佐原（1972 など）に詳しい。詳述すると煩雑になるため、ここで用いる回転台は「製作する土器（うつわ）を回転させるためのせる台」と大雑把な定義にしておく。

※ 佐原（1972）は G・M・フォスターの訳文（「土器の話 (9)」として『考古学研究』19-1 所収）。

4) 遺跡数は報告書などで確認したもの。報告のない古墓などを含めればこれ以上である。

5) 野城式土器は下地が設定（下地 1978）したものとし、高腰城跡（城辺町教委 1989）の土器と比較した。

引用・参考文献 ※文中で沖縄県立埋蔵文化財センターは埋文センター、教育委員会は教委と略記

安里 進 1975「沖縄陶器等の影響を受けた宮古式土器について」『やちむん』5 やちむん会

上野村教育委員会 1980『宮国元島遺跡』

沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡』Ⅰ

沖縄県教育委員会 1997『湧田古窯跡』Ⅲ

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001a『天界寺跡』Ⅰ

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001b『首里城跡ー下之御庭・ほか地区ー』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001c『ヤッチのガマ カンジン原古墓群』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002a『新里元島上方台地遺跡 新里東元島遺跡』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002b『天界寺跡』Ⅱ

沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『尻並遺跡』

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡ー書院・鎖間地区ー』

城辺町教育委員会 1989『高腰城跡』

島袋綾野 2005「「パナリ焼のイメージ」を考える」『沖縄文化研究所所報』57 沖縄文化研究所

下地和宏 1978「野城（ぬぐすく）式土器について」『琉大史学』10 琉球大学史学会

高宮廣衛 1981「編年試案の一部修正について」『南島考古』7 沖縄考古学会

平良市教育委員会 1983『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告』

## 付編 1 阿良東遺跡の試掘調査で出土した土器

### ①調査の概要および出土遺物

2009 年 7 月 28・29 日に阿良東遺跡において、建物建設に伴う試掘調査を実施した。阿良東遺跡は伊江島南東部に所在する砂丘遺跡である。試掘場所は公園になっている地点において、試掘坑を 7 ケ所設けて調査を行った。このうち 6 ケ所は掘り下げ後すぐに岩盤を確認したり、2 m 近い攪乱層であった。遺物包含層は公園のほぼ中央の試掘坑で確認（第 6 図）し、土器、石器、貝製品、貝類が出土した。土器は高宮編年前期から同後期の土器が混在するが、第 7 図 5 が包含層の最下層から出土したため高宮編年後期の遺物包含層と判断した。

ここでは出土した遺物のうち土器をとりあげる。回収した遺物のほとんどは重機掘削で掘り上げた土から採集したものであるが、すべて遺物包含層から回収した土から採集した。

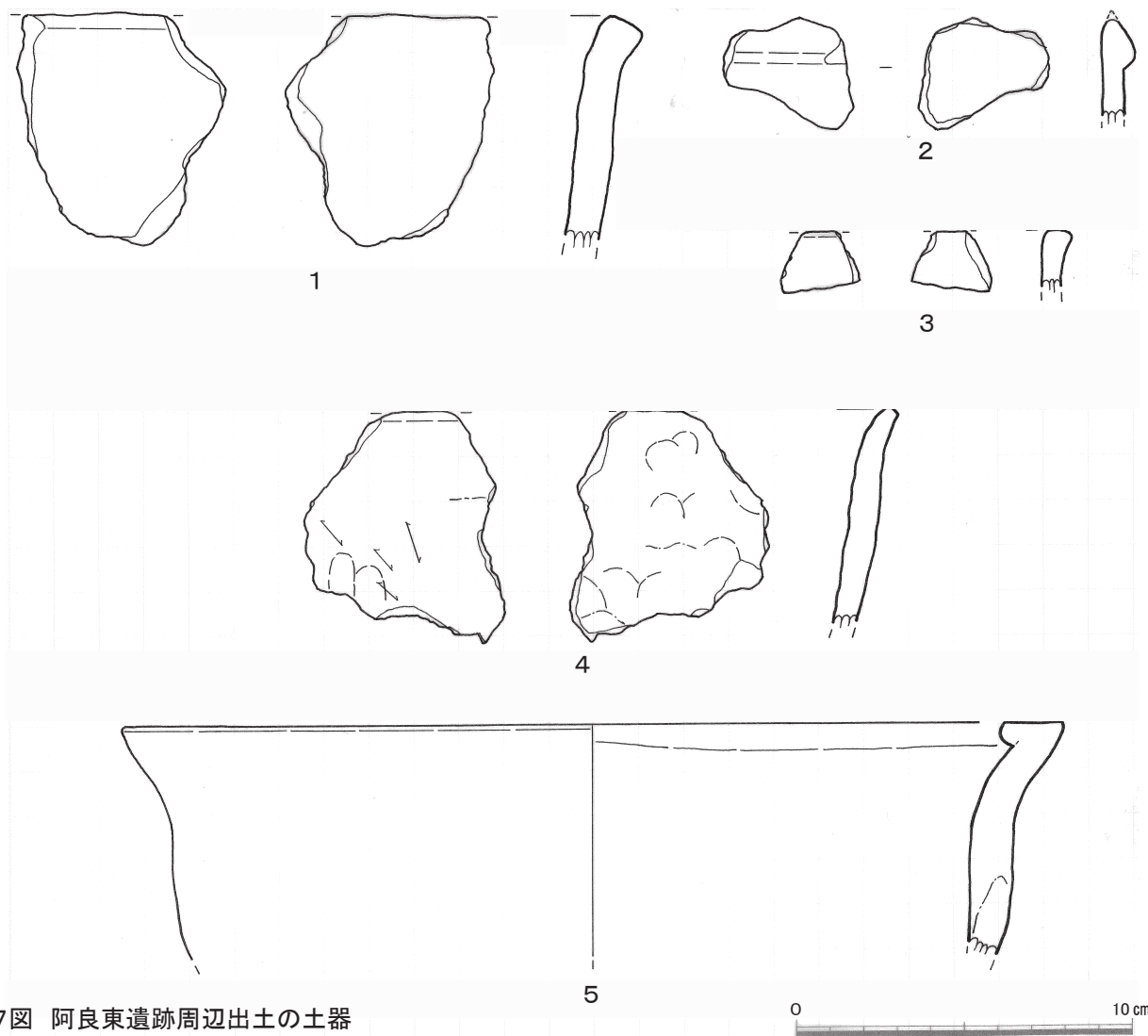
出土した土器は第 7 図で、1～3 は前期土器、4 は後期土器、5 は弥生系土器である。前期土器では室川式土器と宇佐浜式土器、後期土器は大当原式土器である。以下、遺物の詳細を述べる。

1 は室川式で、口縁が弱く開く深鉢形で口縁はわずかに肥厚する。西長浜遺跡分類（埋文センター）の B 2（イ）にあててよいだろう。焼成は良好で、胎土は砂質、混和材に石灰岩粒、粘板岩、石英を多く含む。器面調整は不明。色調は外面が明赤褐（2.5YR5/8）、内面は橙（7.5YR6/8）である。

2 は宇佐浜式で、資料が小さいため器種は不明、口縁肥厚部の形成は弱い。焼成は良好で、胎土は砂質、混和材に石灰岩粒などの細粒を含む。器面調整は不明。色調は外面が赤褐（2.5YR4/6）、内面は明赤褐（2.5YR5/8）である。







第7図 阿良東遺跡周辺出土の土器



図版7 阿良東遺跡周辺出土の土器



3は型式、器種不明の前期土器である。焼成は良好で、胎土は砂泥質、混和材に石灰岩粒などの細粒を含む。器面調整は不明。色調は内外とも明赤褐（2.5YR5/8）である。

4は大当原式で、口縁が弱くハの字に開く深鉢形である。焼成は良好で堅緻、胎土は砂泥質で、混和材に褐色粒を含む。器面調整は内外面ともナデを施し、内面は指頭痕が残る。色調は外面が赤褐（5YR4/6）、内面は明赤褐（2.5YR5/8）である。

同図5は弥生系土器<sup>1)</sup>で、包含層の最下部（岩盤直上）から出土と確認できた。口縁部を内側に張り出して逆L字状に形成する甕形で、口径は24.1 cmである。口縁は内側へ折り返して成形する。器面調整は不明。焼成は良好で、胎土は砂質、混和材に赤色粒などの細粒を含む。色調は外面が橙（5YR6/8）、内面は橙（5YR6/6）である。胎土や色調は浜屋原式に近く、当該期の在地土器だろう。

## ②これまでの調査との検討

阿良東遺跡、阿良貝塚では数回の調査が行われて、阿良東遺跡では高宮編年前期の包含層（伊江村教委1999）<sup>2)</sup>、阿良貝塚では同後期の包含層（沖縄県教委1983・伊江村教委1999）を確認した。阿良貝塚の調査では後期土器として浜屋原式や大当原式、弥生土器が出土した。今回の調査で出土した土器は大当原式や弥生系土器を含むことから、確認した包含層は阿良貝塚の延長部分とみておく。

## 注意事項

- 1) この資料について、宮城弘樹氏、安座間充氏からご教示いただいた。試掘場所の地図は伊江村教育委員会から提供いただいた。
- 2) 阿良東遺跡の97年調査地点（包含層を確認した試掘坑）は第6図に記入した。出土資料を再確認したところ、大当原式土器（報告書第32図23・24など）が少量あった。1982年の試掘調査（安里・ほか1984）ではアカジャンガー式などの後期土器が攪乱層から出土した。

## 引用・参考文献

- 安里嗣淳・大城秀子・花城潤子 1984「伊江島阿良東遺跡の試掘調査」『紀要』1 沖縄県教育委員会文化課  
伊江村教育委員会 1999『伊江島の遺跡』  
沖縄県教育委員会 1983『阿良貝塚』  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『西長浜遺跡』

## 付編2 天界寺跡出土の銭貨

2009年度に実施した企画展において、展示資料の一つとして天界寺跡から出土した「金圓世寶」をとりあげようと考えたが、資料に難ありと判断して展示は行わなかった。その顛末を記す。

天界寺跡西区の報告で、「金圓世寶と思われるものが1点出土した」とある。図等の掲載がないため資料の確認<sup>1)</sup>を行ったところ、資料整理時に作成した遺物集計カードのメモに「□圓□寶」とあり、これから金圓世寶と推定していた。文字は摩滅のため判読は難しいが金圓世寶の「圓」にあたる部分をそのようにみなしたものだ（図版8）。しかし、これが金圓世寶かはっきりしないことから展示は見送った。

その後、この資料を確認するため糸満市佐慶グスク（糸満市教育委員会1994『佐慶グスク・山城古島遺跡』）出土資料や書籍等掲載の資料との比較、センターにてX線撮影（図版9）を行った。

X線でははっきりとしないが、佐慶グスク資料との比較では両者は明らかに異なっていた。大きさはほぼ同じであるが、佐慶グスク資料は厚みがあるのに対して、天界寺跡資料は「くにがまえ」よりもルーペ観察で「しんによう」に近いと判断できた。「しんによう」であれば「通」の可能性がある。そのため、天界寺

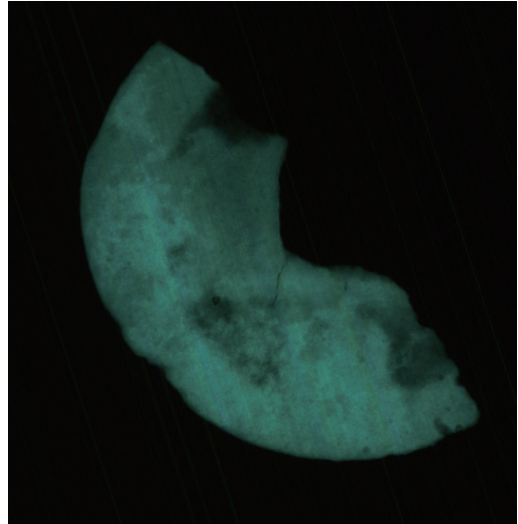
跡資料は「圓」と誤読していることから、「□□□寶」（または「□□通寶」）の不明銭とする方が適當である。

今回の確認によって、天界寺跡出土の資料は金圓世寶でないことが考えられる。以後、この資料については留意してほしい。

今回の報告にあたって、佐慶グスク出土銭の実見は糸満市教育委員会湖城清氏、大城一成氏に、X線撮影はセンターの知念隆博氏にお手間をおかけしました。ありがとうございます。



図版8 天界寺跡出土の「金圓世寶」



図版9 「金圓世寶」のX線写真

#### 注事項

- 1) 同資料が入っていた袋に記してある遺物の通し番号と、遺物を集計した一覧表へ転記した番号が異なっていた。そのため、各資料を検討し、これ以外に金圓世寶とした資料のないことを確認した上で該当する資料と判断した。

#### 後記

土器の実測、図版作成といった一連の作業を行うのは久しぶりであった。実測図などあやしい点はお許しいただきたい。また、資料室の皆さんへは作業中にも関わらず色々とお手数かけました。いつもながらご協力ありがとうございます。

今回の報告は原稿執筆にあたっての反省からきたものである。一旦報告したものではあるが、不足する部分、訂正する部分があったことをお詫びいたします。

(にしめ あきら：西原高等学校)